HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	成人ASD（自閉症スペクトラム障害）当事者の博物館利用の現状と課題 ： 「科学コミュニケーション」の場としての博物館の役割に着目して
Author(s)	沼崎, 麻子; 藤田, 良治; 鈴木, 誠 他
Citation	科学技術コミュニケーション, 15, 73-89
Issue Date	2014-06
DOI	https://doi.org/10.14943/66447
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56447
Type	departmental bulletin paper
File Information	web_Costep15_73.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

報告

成人ASD（自閉症スペクトラム障害）当事者の博物館利用の現状と課題

～「科学コミュニケーション」の場としての博物館の役割に着目して～

Present Situation and Issues on Museum Usage of Adults with ASD: Focus on the Role of Museum as a Place of "Science Communication"

沼崎 麻子[1]，湯浅 万紀子[2]，藤田 良治[2]，鈴木 誠[3]，
松田 康子[4]，吉田 清隆[3]，斉藤 美香[5]

NUMASAKI Mako, YUASA Makiko, FUJITA Yoshiharu, SUZUKI Makoto,
MATSUDA Yasuko, YOSHIDA Kiyotaka, SAITO Mika

Abstract

As a place of science communication, museums are being expected to encourage all citizens to avail and participate in its activities. This paper focuses on adults with ASD (Autism Spectrum Disorder) with whom a questionnaire survey was carried out. 80% of them answered they liked museums. There were two main reasons behind this: the appreciation for the museum's side of satisfying intellectual interests and its less burdening atmosphere and environment for people with ASD who are hypersensitive. On the other hand, it became clear that services for improving learning effect are not being sufficiently used by them. They also face some difficulties when using museums: museums might be inconveniently located, do not match well with their hypersensitivity, and often have hard to understand indications and instructions. The result of the survey reveals that there is an expectation for museums to improve usability to match better with people with ASD's characteristics. Such improvement will have to take into consideration different positions that people have and obstacles they face, in order to incorporate universal design to museums and develop educational programs that utilize minorities' abilities. On a long-term basis, museums' contribution will be expected for the development of science communication and community.

Keywords: ASD (Autism Spectrum Disorder), museum, science communication, universal design, local community development

---

2014年2月27日受付　2014年5月10日受理
所　属：1. 北海道大学大学院理学院自然史科学専攻
2. 北海道大学総合博物館
3. 北海道大学高等教育推進機構
4. 北海道大学教育学研究院
5. 北海道大学保健センター
連絡先：m-numasaki@museum.hokudai.ac.jp

1. 問題の所在

1.1 本稿の目的

本稿は，成人ASD（Autism Spectrum Disorder/自閉症スペクトラム障害．詳細は1.4で後述）当事者[1)]の博物館の利用実態および利用の際に障がい特性ゆえ支障となりえる要因の可能性を検討し，多様な人々が関わる科学コミュニケーションの場としての博物館のユニバーサルデザインおよび新たな機能の開発に寄与するものである．

併せて本稿では，18歳以上のASD当事者を対象とした博物館の利用状況に関する調査結果を中心に，博物館の新たなコミュニケーション機能の開発についても論じていきたい．なお，ここでの「博物館」は博物館・美術館・資料館等を指し，生物の展示がメインの水族館・動物園・植物園は除外した．

1.2 コミュニケーション・地域貢献の場としての博物館

日本における博物館の機能は，伊藤（1993, 141-148）によると，次のように変化している．もともと博物館は，希少価値を持つ資料の保存施設であり，特別の機会に観覧する非日常的利用の場であった（第一世代）．1960年代末からの博物館は，資料の公開を運営の軸とし，調査研究・収集保管・公開教育という博物館固有の活動を展開する一方，知的好奇心・探究心を満たすための一過性の見学施設へと移った（第二世代）．現在は社会の要請に基づいて必要な資料を発見もしくはつくりあげ，市民の参加や体験を運営の軸とした，人々の知的好奇心や自己学習能力を育成する場所（第三世代）が増加している．

さらに現在の博物館には，コミュニケーション機能や地域貢献という役割が求められている．博物館という学びの場は，利用者が達成感や自己実現，仲間とのコミュニケーションを実感する場としての役割が求められており，博物館もそのことに自覚的になる必要があると，布谷（2013, 6-7）は指摘している．布谷によると，豊かな資料群や学芸員の十分魅力的な研究を背景にした博物館での学習が，地域への関心や良さへの気づきを生み，地域づくりへと繋がっていくという．これを換言すれば，蓄積されてきた資料や研究，それに関する学びを学芸員が地域住民に提供し，学びを支援することで住民の地域への関心や知識を育み，その学びをもって地域の問題の解決や地域おこしに貢献していくということになるだろう．

このような，専門家（学芸員）と市民（地域住民）とが学びあい，地域の活性化に貢献するという博物館の機能は，「博物館における科学コミュニケーション」と位置づけることができる．ここでの「科学」は，自然科学・科学技術のみならず，歴史・文化・芸術といった人文科学の領域も含んでいる．博物館における科学コミュニケーションの具体例を想定してみよう．例えば，その地域で起こりやすい自然災害について学芸員が地域住民にわかりやすく説明する．住民はその知識を背景に過去の災害事例や先人の減災の知恵を学芸員のサポートの下で学び，住民だからこそ知る地域の現況に適合した防災手段を確立していく．博物館がこのような科学コミュニケーション機能および地域貢献機能を担っていることを考えると，博物館にはあらゆる立場の住民の声やニーズを踏まえた上での対応・参加促進が求められていると言えるだろう．

1.3 障がい者およびASD当事者の博物館利用に関する先行研究

発達障がいの一つであるASDの当事者が持つ特性の中には「人より物への関心が強い」というものがある（岡田 2009, 72-73, 221-222）．よって，「モノ」を扱う博物館は，彼らの関心に応える場所と考えられる．それを示しているのが，ASDスクリーニングに用いられている4段階式自己評価指標「自閉性スペクトル指数（AQ）」である．この中に，「博物館に行くよりも劇場に行く方が好き」

かを問う設問がある．ASD当事者は「どちらかといえばそうではない」「そうではない」にチェックを入れる傾向があるとされる（栗田他, 2004）．

2004年の発達障害者支援法の施行を背景に，同法で義務付けられた発達障害者支援センターの設置をはじめ，支援機関や学校教育現場，支援団体等による支援実践が進められている[2)]．しかし，このような状況の一方，博物館・美術館・資料館等のミュージアム施設での障がい者支援・バリアフリー研究の大部分が視覚障がい者を対象としている．山本（2008, 1-3）によると，日本における障がい者の博物館利用支援に関する研究には，戦前における海外の視覚障がい者向け展示の紹介から始まり，国際障害者年（1981）頃の障がい者向けのコーナーの設立，1993年頃の研究の隆盛，日本博物館学協会による「誰にも優しい博物館づくり事業」（2004-06年度）におけるバリアフリー調査研究などがある．

一方，ASDを含めた発達障がい当事者への支援の必要性については2008年頃にいくつか指摘されている程度であり（駒見 2008, 69-70, 84; 松永他 2008, 15-17），その後の議論は管見では見当たらない．ASD当事者の博物館利用の支援実践としては，日本国内では発達障がい児に対応した博物館学習テキストの作成（三谷 2007, 47-55）にとどまっている．また, NPO法人エイブル・アート・ジャパンは，2009～2011年に横浜市民ギャラリーあざみ野で行ったワークショップに参加した障がい者や外国人，親子連れや高齢者の声および彼らの行動観察からの「気づき」を収集し,「みんなの美術館の気づきデータベース」としてウェブ上で公開している．ここでは，発達障がいや自閉症を知的障がいとして扱っている．このデータベースをもとに様々なユーザーの意見・要望を整理し，改善策を提案した『みんなの美術館デザインノート』（美術館×インクルーシブ×デザイン実行委員会 みんなの美術館プロジェクト 2012）では,「知的・発達に障がいのある人」カテゴリを設定している．ここでも，高機能タイプ[3)]のASD当事者については充分言及されておらず，これらのタイプが抱える困難が見過ごされる可能性がある．

高機能タイプの成人ASD当事者を対象とした実践例は,「カラフルブレインアートフェス（CBAF）」（発達障がい当事者による芸術作品や文芸作品の展示会．2008年より年1回開催されている．ただし，美術館ではなくJR札幌駅構内での開催）などの発達障がい者芸術作品展を除けば，管見では日本国内ではみられない[4)]．海外では米国メトロポリタン美術館やニューヨーク近代美術館，および両館の協働による発達障がい者向けワークショップの実践例がある（マックギニス（Rebecca McGinnis）2007, 24-25, 28）．メトロポリタン美術館では，成人発達障がい者がミュージアムツアーやワークショップの運営に関わった実績もある（同, 26-27）．またCBAFを主催する「Colorful Brain アートフェス実行委員会」には，札幌市の支援機関や障がい福祉課，支援団体，家族会の他，複数の発達障がい当事者会が関わっている．これらは当事者が博物館活動・展示活動の能動的な担い手として参加するという点で評価できるが，このような例は極めて少ない．

以上のように，日本国内においてASD，とりわけ高機能タイプの当事者への利用支援は，その必要性が指摘されているにもかかわらず実践が遅れているということができる．

彼らの「モノ」への関心に応えられるよう，博物館の利用や学びを支援するには，彼らがどのように博物館を利用し，また利用する上でどのような困難を感じているかを明らかにすることが不可欠である．それにより，ASD当事者の特性由来の困難を軽減し，活用を促進する方策を導き得るだけではない．博物館を誰もが利用しやすい場にするためのユニバーサルデザインの実現や，博物館において様々な立場の人々が参加しやすい科学コミュニケーションの場を創造するための一助となることが期待できる．

1.4 ASD概説

本論に入る前に，ASDについて概観したい．ASDは先天的な脳機能の発達の偏りより生じる発達障がいである．2013年から精神医学の国際的診断基準がDSM-5に改訂されたことで新たに設けられた診断名である．ひとつ前の診断基準であったDSM-Ⅳ-TR（2000年改訂）では「広汎性発達障害（PDD/ Pervasive Developmental Disorder)」「自閉性障害」「アスペルガー障害（AS/ Asperger's Syndrome)」「特定不能の広汎性発達障害（PDD-NOS/ Pervasive Developmental Disorder Not Otherwise Specified)」等と診断されていた[5]．

ASDに由来する特性には次のようなものがある．社会生活を送る上で弱みとなりえる特性の一つは，診断基準の一つでもある社会的コミュニケーションや対人行動の困難である．具体的には，「いつ会話に加わればよいかがわからない」「場に応じて自分の行動を変えることが難しかったり，会話の微妙なニュアンスを読み取ることが難しかったりする」「1人でいることを好む」等として現れる．同じく診断基準としては「限局的，反復的な行動や興味のパターン（こだわり)」があるが，その要素の一つとして「特定の感覚に対する敏感さや鈍感さ，こだわり」がある（千住 2014, 42-45)．特に感覚が過敏である場合，BGMやテレビの音が拷問のように感じられたり，白地の紙に黒い活字はコントラストが強すぎて集中して読めないことがあったり，偏食や触覚・匂いに敏感等の困難がある（岡田 2009, 78)．その一方，非当事者と比べて学業や職業生活において強みとなりえる特性もある．「高い言語的能力がある」「優れた記憶力と豊富な知識がある」「秩序や規則を愛する」等がその例である（岡田前掲, 216-229)．しかし，特性の現れ方や程度は個人差が極めて大きい．自身もASD当事者である言語聴覚士の村上（2010, 232-3）が指摘するように，ASD当事者には向かないとされる対人業務で活躍する者も存在している．

1.5 調査の目的

ASD当事者の博物館利用を支援するには何が必要なのかを明らかにする前段階として，成人ASD当事者を対象とした博物館の関心・利用状況調査を行った．なお，本稿における「成人」とは，高等学校卒業年齢である18歳以上かつ高等学校に現在在学していない者を指す．これは，学校カリキュラムとしての受動的な団体博物館見学の機会のない年代における自発的な博物館利用の状況を調査するために設定したものである．ここでは，以下3点を明らかにすることを目的とした．

① そもそも博物館に関心を持っているのか.
② 実際にどのような施設や展示，サービスをどの程度利用しているのか.
③ 当事者は博物館を利用する上でどのような困難を感じているのか.

ここから導き出された結果は，今後の利用支援・博物館のユニバーサルデザインの確立への一助となることが期待される．一例として，この調査結果を土台とした，成人ASD当事者を対象とした博物館での教育プログラムの開発を行う予定である（5章にて後述)．

2. 調査の概要

2.1 質問紙の構成および調査内容

質問紙法にて，博物館利用に関する調査と，就労･就労支援についての意識調査を同時に行った．質問紙構成について表1に示す[6]．

表1　質問紙構成

設問群	設問	回答方法
質問 A 博物館に 関する質問	Q.A-1　博物館は好きか嫌いか	4段階1択式
	Q.A-2　好きな理由(Q.A-1からの分岐)	22項目複数選択式
	Q.A-3　嫌いな理由(Q.A-1からの分岐)	23項目複数選択式
	Q.A-4　利用する展示・施設・サービス	14項目・4段階1択式
	Q.A-5　博物館での困難	12項目・4段階1択式
	*Q.A-6　博物館ボランティア経験	2項目1択式
	*Q.A-7　北海道大学総合博物館「社会体験型科目」受講希望	5項目複数選択 最上位を特記

*質問 B　現在と過去の仕事に対する意識とサポートの状況についての質問　（就労状況により分岐）
*質問 C　現在と過去の仕事に対する意識とサポートの状況についての質問　（就労状況により分岐）
*質問 D　過去3年以内に就労経験がない場合の仕事に対する意識とサポートの希望についての質問
*質問 E　ASDに対する意識と自身のスキルについての質問
*質問 F　就労支援に対する意識についての質問

設問群	設問	回答方法
質問 G フェイス シート	年齢	自由記述
	性別	3項目1択式
	ASD診断名	自由記述
	*診断時年齢	自由記述
	*ASD以外の発達障がいの診断名	自由記述
	*ASD以外の発達障がいの診断時年齢	自由記述
	障害者手帳取得の有無	3項目1択式
	障害者手帳の種類(前問からの分岐)	自由記述
	*障害者手帳取得時年齢(前問からの分岐)	自由記述
	学歴(学校種および在卒状況)	自由記述／3項目1択式

設問群	設問	回答方法
後付	*自由記述を論文等に掲載する際に掲載を希望しない属性の有無	7項目複数選択式
	*研究結果報告希望の有無および面接調査協力可否	4項目1択式
	*連絡・謝礼送付専用情報(調査方法により異なる) 氏名(ハンドルネーム)・メールアドレス・住所	自由記述
（注）　*が付されている項目は,本稿での記述･分析では使用しなかったものである.		

本調査では成人ASD当事者という集団の中でも属性による差違がみられると仮定し，各設問で得られた回答との分析対象とした．分析対象とした属性は，性別・年代・障害者手帳の有無・学歴である．これらの属性は，P.コトラーとN.コトラーがミュージアム・マーケティングにおける市場アプローチレベルの一つとして提示した「市場細分化マーケティング」の基準の一つ「人口統計的細分化」に基づく．人口統計的要因は利用者を細分化するためのもっとも一般的な方法であり，利用者の欲求，嗜好，利用率との相関関係が高い場合が多く，他要因と比べて測定しやすいという特徴がある．また，ターゲット市場が人口統計的な項目ではない基準で定義されている場合であって

も，ターゲット市場の大きさやその市場に効果的に訴求する方法を知るために，人口統計的な特徴との関連を調べる必要があるという（P.コトラー他 2006, 166-170）．今回対象とした成人ASD当事者は人口統計的な項目ではない基準で定義されており，属性による差違がみられた場合，効果的な利用促進・支援の方策に結び付くと考えられる．なお，診断名については，今回の分析の対象外とした．DSMで定義されていない診断名（「高機能自閉症」など）で診断されるケース，医師によって診断名が変わるケースがあり，厳密に区分されるとは限らないためである（注5・注7を参照）．

特に注目すべき属性として考えられるのは学歴である．これまでは，「全般的にミュージアムの来館者と会員は，中・高所得層で高学歴の人の割合が人口構成と比べて高い場合が多」（P. コトラー他前掲, 171）く，主に都市部に住む高所得の単身者または子供のいない夫婦で構成され，そのほとんどが大学卒である「『若き知識人』クラスター」がミュージアムにとっての魅力的なターゲットとされていた（同, 176-178）．よって，学歴の深さ，すなわち学習経験の蓄積の違いが，博物館の利用層を特徴づける一つの要因として位置づけられている．一方，既に述べた通り，ASD当事者は博物館の扱う対象でもある「モノ」に関心を持つ傾向がある．そこから，次の2つの仮説が設定できる．

仮説①　ASD当事者は学歴と関係なく博物館に関心を持つという傾向がある

仮説②　仮説①が正しければ，学歴の違いによって博物館を好む理由に何らかの特徴が表れる

この仮説を検討することにより，博物館に関心を持つ層の新たな特徴づけが可能となるといえるだろう．

2.2 調査対象

本調査では，18歳以上でASD（および旧診断名）と診断されたことのある者を対象とした．札幌市・帯広市の発達障がい当事者会（計7団体）の参加者，札幌市の医療機関（1機関）・同支援機関（2機関）の利用者，札幌市内で開催された障がい者向け学習講座参加者，札幌市の教育機関在学者，北海道内在住の筆者の知人および調査協力者から紹介された当事者のうち，調査協力に同意した者に回答を依頼した．

2.3 調査方法

調査方法は，郵送調査・集合調査・留め置き調査のいずれかで行った．これは，調査対象者が非常に限られることから標本数を一定数確保することを重視し，調査協力を依頼した団体・機関の希望を優先させたことによる．また，調査協力者の希望や状況を尊重したため，一つの団体内で郵送調査での回答者・集合調査での回答者が混在する場合があった．回収方法は以下の通り．

郵送調査…会場等に集合した調査対象者で調査に同意した者に，その場で質問紙を配布（もしくは，調査協力を希望した対象者に質問紙を郵送）し，回答後，郵送返送させた．返送時の郵送料は当方で負担した．

集合調査…調査対象者を会場等に集合させ，調査に同意した者にその場で質問紙を配布し，回答記入後回収した．当事者会の例会時に調査者が直接出向くもしくは会場に対象者を出向かせる方法（直接型）と，団体・機関担当者に質問紙を預け，担当者が会場を設定して調査対象者に協力意志を打診し，その場で回答させる方法（依頼型）の2種類で行った．

留め置き調査…機関の担当者を通して調査協力の意思を調査対象の条件に合う者に打診し，調査に同意した対象者に質問紙を配布．後日，担当者が調査者に代わり集合調査を実施もしくは各自自宅等で回答後，封をした状態で担当者に提出させ，後日調査者が回収した．

謝礼として北海道大学総合博物館グッズを協力者に送付・手渡しした.

2.4 回収数

配布数66部，全回収数52件，有効回答数45件であった．うち，博物館に関する設問に回答せず，就労・就労支援についての設問とフェイスシートのみに回答した者が3名いた．調査方法別（郵送調査は質問紙の配布方法別，集合調査は直接型・依頼型の別）の配布数・回収数・有効回答数を表2に示した.

表2　調査方法別配布・回収・有効回答数

調査方法	郵送調査		集合調査		留め置き調査	計
配布・実施方法	その場で配布	質問紙郵送	直接型	依頼型		
配布数（部）	16	5	19	14	12	66
回収数（件）	14	5	19	9	5	52
有効回答数（件）	14	5	16	6	4	45

（注）
集合調査・依頼型および留め置き調査の配布数は，依頼時に調査者から担当者に預けた部数．無効回答については，集合調査・直接型は対象者以外の回答，依頼型は機関の希望で対象者以外のダミー回答を行ったこと，留め置き調査は回答放棄による.

3. 調査結果

3.1 集計および統計処理の方法

集計には単純集計およびクロス集計を用いた．回答方式が順序尺度であるQ.A-1「博物館の好き嫌い」・Q.A-4①～⑮「博物館で利用する（利用しない）展示・施設・サービス」・Q.A-5①～⑫「博物館での困難」の各設問について，回答者の属性によって差があるか否かを調べるため，有意水準5%で検定を行った．検定法としては，属性を2群に分ける性別（男性／女性），障害者手帳（有／申請中および無）についてはマン・ホイットニーU検定を用い，属性を3群以上に分ける年代・学歴についてはクラスカル・ウォリス検定を用いた（使用ソフト：PASW Statistics 18）．さらに，博物館を好む理由と回答者属性の対応を調べるためコレスポンデンス分析を行った（使用ソフト：Excel 2002および数量化理論Ⅲ類解析アドイン（3Quantify97.xla）Ver.1.2）.

3.2 回答者の属性

回答者の性別比は男性57.8%，女性42.2%，その他0.0%であった．年齢層は，20代が46.7%，次いで30代の26.7%，40代の15.6%，50代6.7%，10代4.4%である．最年少は19歳，最年長は52歳，平均年齢は32.3歳（「30代」とのみ回答した1名を除く）であった.

ASDの現在の診断名はASで44.4%，PDDが17.8%，PDD-NOSが8.9%，自閉症が4.4%，高機能自閉症とASDが各2.2%，その他（発達障害・高機能性発達障害・発達障害（合併障害）と回答）6.7%，未記入13.3%であった[7]．

全体の66.7%が障害者手帳[8]を取得しており，同6.7%が取得申請中と回答した．取得者のうち40.0%が療育手帳のみの取得であり，精神障害者保健福祉手帳のみを取得しているのは23.3%，療育手帳・精神障害者保健福祉手帳両方を取得しているのは13.3%，手帳種不明は23.3%だった．基

本的に知的障がい者に交付される療育手帳の取得者が多いのは，現在札幌市では高機能ASD当事者も取得可能であるためと考えられる．

学歴（在学者･中退者含む）は高等学校が37.8%, 大学が24.4%, 専門学校が11.1%, 短期大学が6.7%, 中学校が4.4%，大学院修士課程が2.2%，無回答13.3%であった．

3.3 博物館の好き嫌いについて[n=45]

Q.A-1 「あなたは，博物館が好きですか.」

最初に，博物館の好き嫌いについて,「大好き」「好き」「嫌い」「大嫌い」の4段階で質問した．その結果を図1に示す．

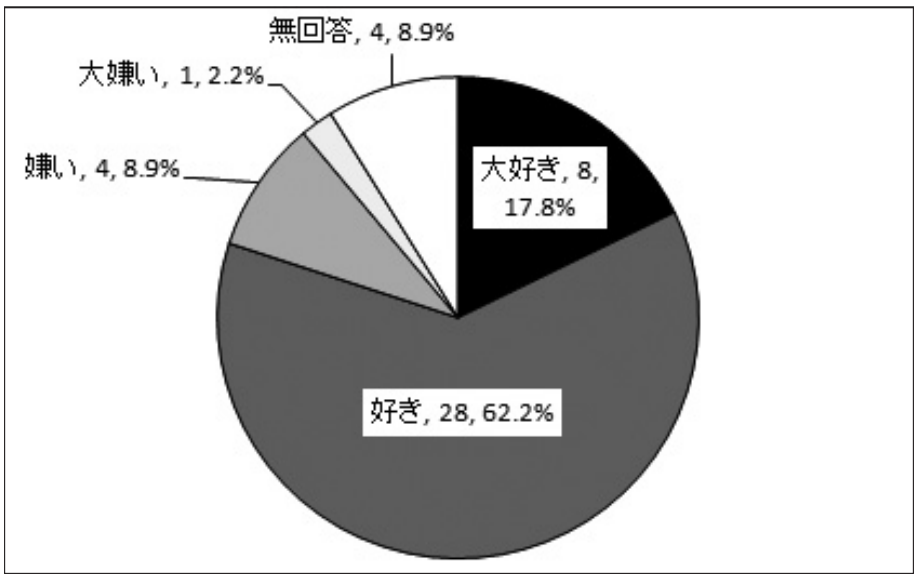

図1　博物館は好きか嫌いか[n=45]

その結果, 回答者の17.8%が「大好き」, 62.2%が「好き」, 8.9%が「嫌い」, 2.2%が「大嫌い」と回答した．なお，性別・年代・学歴・障害者手帳の有無との検定の結果，統計的な有意差はみられなかった．本調査の対象となったASD当事者においては，属性を問わず，80%の者が博物館を好んでいることが示された．よって，2.1で示した仮説①「ASD当事者は学歴と関係なく博物館に関心を持つという傾向がある」は裏付けられた．

3.4 博物館を好む理由[n=36]

Q.A-2 「あなたが博物館を好きだと思う理由は何ですか.」

前出の質問で，博物館が「大好き」「好き」と回答した者に対し，その理由を選択式・複数回答で質問した．選択肢はASD当事者の特性の現れ方として示されることの多いものとの関連や，質問紙作成前に実際に当事者や支援者が博物館について調査者に語った内容を参考に設定した．なお，選択肢は曖昧な表現を避けるため，22種（その他含む）に細分化・具体化した．その結果を表3に示した．

理由として多く挙がったのが「本物・実物の資料を見ることができる」が80.0%,「勉強になる」「珍しいものがある」が77.8%,「『もの』を見ることが好き」が63.9%,「説明文を読むのが好き」が41.7%,「実際に触ることができたり，体験できたりするものがある」が33.3%であり，本調査においては博物館における知的関心の充足という側面が好まれていることが分かる.

また,「ひとりで行っても楽しめる」が61.1%,「静かで落ち着く」が50.0%,「博物館の雰囲気が好き」が41.7%と，博物館の環境・雰囲気を理由とする回答も比較的高い割合になっている.

「その他」における自由回答にも，知的関心の充足や雰囲気についての記述がみられた.

表3　博物館を好む理由[n=36]

項目	実数（人）	割合（%）
本物・実物の資料をみることができる	29	80.6
勉強になる	28	77.8
珍しいものがある	28	77.8
「もの」を見ることが好き	23	63.9
ひとりで行っても楽しめる	22	61.1
静かで落ち着く	18	50.0
博物館の雰囲気が好き	15	41.7
説明文を読むのが好き	15	41.7
実際に触ることができたり，体験できたりするものがある	12	33.3
あまりお金がかからない	10	27.8
博物館のショップ（売店）が好き	9	25.0
博物館と聞くだけでわくわくする	9	25.0
楽しかった思い出がある	9	25.0
その他	9	25.0
博物館グッズを見たり買ったりするのが好き	6	16.7
暗いので落ち着く	6	16.7
博物館のレストランやカフェが好き	4	11.1
家族や友達との話題になる	4	11.1
イベントやワークショップ，講習会に参加できる	4	11.1
スタッフの解説を聞くのが好き	3	8.3
家族や友達と楽しめる	3	8.3
家や学校，会社の近くにある	1	2.8

＊「その他」における自由回答

〈知的関心の充足〉

・特にガンダムなどのアニメやゲームに興味あるからです
・自分自身が凝っているもの（私の場合，特に天文・地学・航空）のことがよくわかるから
・教科書に載っていたものの本物を，実際に見ることができる
・普段目にすることがないものが見れるから
・知的興味，好奇心を刺激する
・学術的な分野全般に興味があるので，見ていて面白い

〈雰囲気〉

・天井が高く空間にゆとりのある処が多い

〈その他〉

・好きなので
・妄想する

また，属性でグルーピングできるものの差の影響をみるため，年代・学歴と博物館を好む理由とのコレスポンデンス分析を行った．その結果，好む理由の傾向に差がみられた学歴について述べたい．

まず，学歴と好む理由とのコレスポンデンス分析の結果のバイプロット図を図2に示す．累積寄与率は57.4%であった．

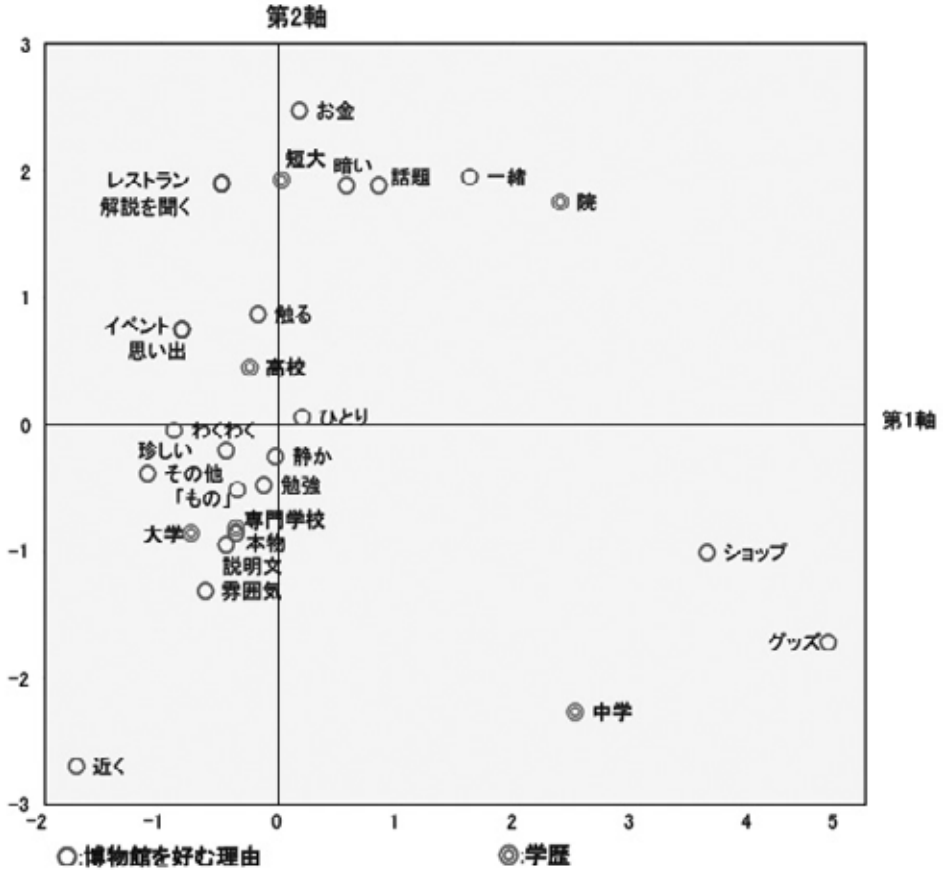

図2　学歴と博物館を好む理由のコレスポンデンス分析結果

第1軸では，正の方向にいくにつれ「レジャー色」が強くなり，逆に負の方向にいくにつれ「知的関心の充足」が強くなると解釈できる．第2軸では，正の方向にいくにつれ「感覚的・身体的」な楽しみ方が強くなり，逆に負の方向にいくにつれ「知的」な楽しみ方が強くなると解釈できる．

また，この分析の結果を通し，博物館を好む理由の傾向として，専門学校卒および大学卒の回答者については「知的関心」，高等学校卒の回答者については「体験」と違いが示された．それに伴い，2.1で示された「学歴の違いによって博物館を好む理由に何らかの特徴が表れる」という仮説は裏付けられた．

3.5 博物館が嫌いな理由[n=5]

Q.A-3 「あなたが博物館を嫌いと思う理由は何ですか.」

同じくQ.A-1で「博物館が嫌い」「大嫌い」と回答した者に対し，その理由を選択式・複数回答で質問した．比較のため，前節での選択肢と対になるような選択肢を中心に23種（その他含む）設定した．回答者が少ないため，必ずしも母集団に近い結果とは言えない．

まず，回答者5名のうち4名が「家や学校，会社の近くにない」ことを理由に挙げている．関連して，「行くのが面倒」という回答も2件あった．

3名が回答した項目は「博物館が好きな人が周りにいない」「ひとりで行っても楽しめない」「うるさかったり，人が多かったりしてつらい」「『もの』を見ることに関心がない」であった．

他に2名が回答したものに「説明文を読むのが面倒」「博物館に怖いイメージがある」「つまらない」，1名が回答したものに「勉強にならない」「イベントがつまらない」「どこも同じようなものしか置いていない」「説明文やスタッフの解説が難しすぎる」「入館料が高い」「誰かと一緒に行くとつまらない」「疲れる」「その他（興味がない）」があった．

3.6 博物館で利用する（利用しない）展示・施設・サービス[n=45]

Q.A-4 「あなたは，博物館ではどんな展示や施設，サービスをどのくらい利用していますか.」

博物館の展示･施設･サービスの利用状況について多くの館に共通するもの，博物館の規模によっては存在するもの14種をピックアップし，「いつも利用する」「時々利用する」「あまり利用しない」「利用しない」の4段階で評価させた．その結果を図3に示す．

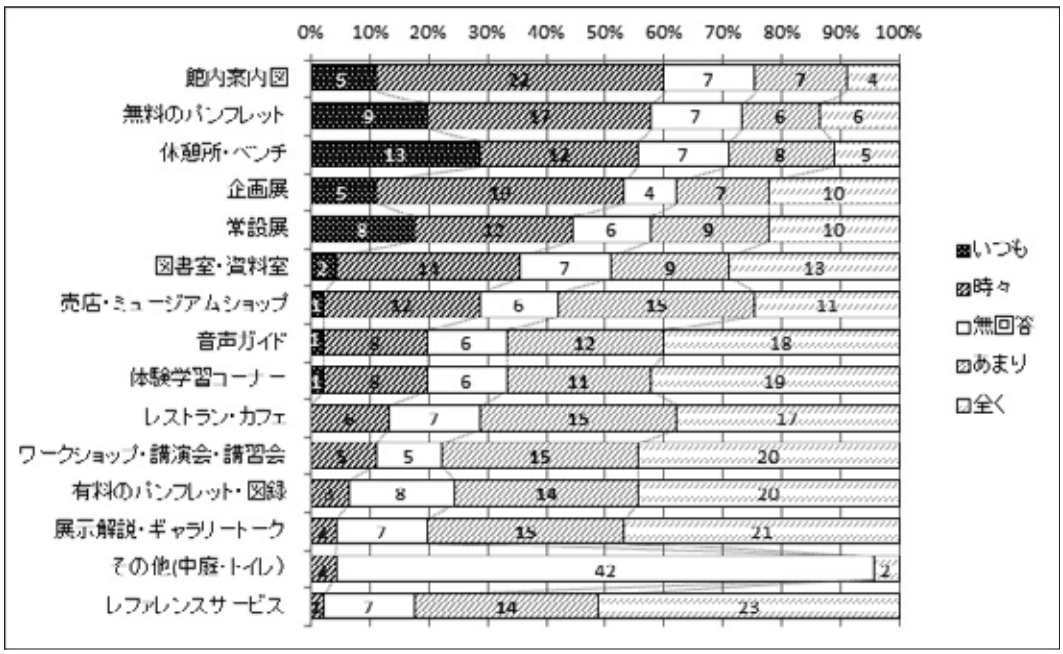

図3　博物館における展示・施設・サービスの利用状況（単位：人，n=45）

「いつも利用する」「時々利用する」が「あまり利用しない」「利用しない」を上回ったのは，館内案内図，無料のパンフレット，休憩所・ベンチ，企画展，常設展であった．一方，学習を深めるためのサービスにおいて「いつも利用する」「時々利用する」と回答した者は，音声ガイドで20.0%，講習会などの教育普及イベントで11.1%，図録などの有料パンフレットでは6.7%，展示解説は4.4%，レファレンスサービスは2.2%という結果となった．

なお，クラスカル・ウォリス検定の結果，ワークショップ・講演会・講習会の利用は年代により有意差がみられた（P値=0.017）．この項目で「時々利用する」と回答した者は20代2名（20代の9%），40代3名（40代の43%）であった．

Q.A-1で博物館が「大好き」「好き」と回答しているにもかかわらず，常設展・企画展とも「あまり利用しない」もしくは「利用しない」と回答した者が10名（全体の22.2%）いた．そのうち，追加調査に同意した調査協力者（20代男性，AS）に，博物館の利用頻度および展示を利用しない理由と，どのような展示があれば利用したいと思うかについて電子メールにて尋ねた[9]．彼は「基本的にはそういった施設にはいきません」「博物館は好きですが，わざわざ足を運ぼうと思うほどではないからです」と答えた．また，「何かの拍子に博物館のチラシなどを見て，それに興味を惹かれるような展示品の情報がありましたら，そのとき博物館に行くと思います」とも回答していた．

3.7 博物館での困難[n=45]

Q.A-5 「あなたは，博物館を利用していて困ることはありますか.」

ASD当事者が博物館を利用する上で生じる可能性のある困難を，日常における感覚過敏による困難の事例や実際の当事者・支援者の話および駒見の指摘（2008, 69-70, 4章にて後述）を参考に検討し，「いつもある」「時々ある」「あまりない」「全くない」の4段階で評価させた．その結果を図4に示す．検定の結果，属性による有意差はみられなかった．

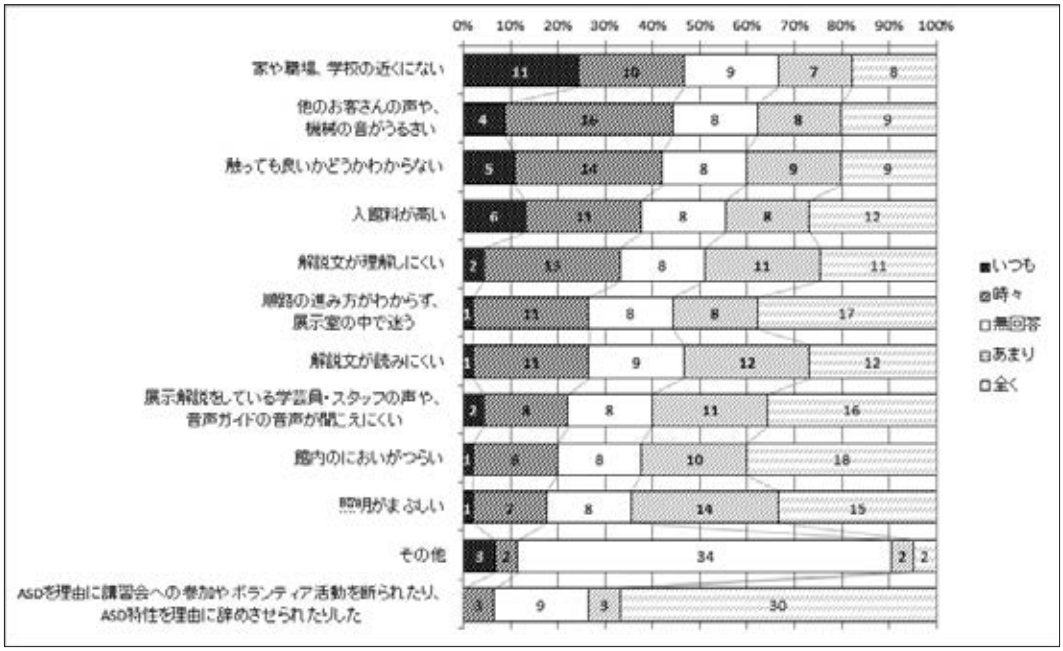

図4　博物館での困難（単位：人，n=45）

「いつもある」「時々ある」と回答した数が「あまりない」「全くない」を上回ったのは，「家や職場，学校の近くにない」の46.7%，「他のお客さんの声や，機械の音がうるさい」の44.4%，「触っても良いかどうかわからない」の42.2%であった．

また，6.6%（3名）が「ASDを理由に講習会への参加やボランティア活動を断られたり，ASD特性を理由に辞めさせられたりした」に「時々ある」と回答している．

「その他」の自由記述には，展示物の匂いや来館者の体臭，閉館時間が早いことや説明を読むのに時間がかかること，人間関係，学芸員が早口であることがあげられた．

4. 考察

4.1 本調査から明らかになった点

図1「博物館は好きか嫌いか」の結果より，本調査の対象となったASD当事者においては，学歴をはじめとした属性を問わず，80%の回答者が博物館を好んでいることが示された．

表3「博物館を好む理由」の結果から，博物館の知的関心を充足する機能や，博物館の環境・雰囲気が好まれていることが示された．

この博物館を好む理由の傾向については，図2「学歴と博物館を好む理由のコレスポンデンス分析結果」の結果より，学歴によって違いがみられた．従来，低学歴者は博物館の利用層としてはほとんど着目されてこなかった．しかし，本調査の結果からは，高等学校卒業程度の学歴であっても，博物館での「体験」を好む当事者もいることが示された．この層は今後の利用促進・支援におけるターゲットとしての可能性を秘めていると言えよう．教育普及活動においてASD当事者を対象とする際や利用の便を図る際，学歴やそれに伴う関心の傾向は検討要因の一つとなりえる．

4.2 今後の課題

今後のASD当事者の博物館利用の促進・支援に繋げるため，さらなる検討が必要な点を5点示す．

1点目は，図3「博物館における展示・施設・サービスの利用状況」の結果から，Q.A-2で博物館を好む理由として知的関心の充足をあげている回答が多いにもかかわらず，学習を深めるためのサービスが十分活用されていないことが示されたことである．少なくとも図書室と音声ガイドについては，今回の回答者が居住する北海道内の博物館においては，設置率・所有率が比較的高い．文部科学省（2013）を分析した結果，2011年10月1日現在，北海道内の博物館61館における図書室の設置率は50.8%（全国平均49.4%，全都道府県順位20位），音声ガイド（日本語もしくは外国語・日本語）所有率は22.0%（全国平均15.8%，全都道府県順位7位）であった．よって，今回の回答者は，他都県よりはこれらを所有する館・施設を訪れる可能性が高いものの，実際の利用には至っていないと考えられる．その理由は今回明らかにできなかったため，今後の課題とした上で改善策へと繋げたい．

2点目は，今回年代との検定結果で有意差がみられたワークショップ・講演会・講習会の利用である．今後ASD当事者を対象とした教育普及活動を企画する際，年代が一つのファクターとなりえることを示唆しているため，さらなる検討が必要である．

3点目は，図3およびメール調査の結果で示された，博物館に関心はあっても，実際の博物館利用と結びつくとは限らない可能性である．電子メール調査の回答者が1名のため，博物館は好きでも展示を利用しない層全てに当てはまるとは限らない．しかしこれに加え，表3「博物館を好む理由」の自由記述で「特にガンダムなどのアニメやゲームに興味あるからです[10)]」（30代男性・AS）「自

分自身が凝っているもの（私の場合，特に天文・地学・航空）のことがよくわかるから」(50代女性・PDD) という回答があったことにも着目したい．ASDの診断基準のひとつには限局的な興味のパターンというものがあり，とても細かい特定の物事に対する強い関心がみられることもあるという（千住 2014, 44-45）．関心の対象が限定される当事者をいかに来館者として取り込むかという課題に繋がる点である．

4点目は今回示された困難がASD当事者特有のものであるかどうかという点である．図4「博物館での困難」における回答結果で最も多くあげられた「家や職場，学校の近くにない」は，感覚が過敏なため同じことをしていても何倍も疲れやすい（岡田 2009, 178）タイプの回答者には，博物館への移動の負担が大きいと思われることを反映していると思われる．一方で育児世代（小中学生の子どものいる親）も，博物館で42.9%，美術館で51.8%が博物館・美術館に行かなくなった理由として「身近なところにない」と回答している（的場 2006, 10）．よって，これは非当事者にも共通する困難であるともいえる.「他のお客さんの声や, 機械の音がうるさい」については, 受容性言語能力（言葉を聞き取り理解する能力）が弱いタイプ（岡田 2009, 59）の当事者が抱える困難の可能性,「触っても良いかどうかわからない」については、ルールを視覚化することで動きがとりやすくなるタイプ（同150）の当事者にとって，明確な視覚的指示がないために起こりうる可能性がある．これらの困難はコントロール群の調査がないため，ASD当事者特有であるとは言い切れない．ASD特性として示されることの多い特性は非当事者もいくつか持ち合わせていることを考えると，“ASD特性のない非当事者”を調査対象として抽出するのではなく，一般利用者をコントロール群とするのが妥当であろう．それにより，ASD当事者特有の困難の実態を明らかにし、当事者に特化した利用促進支援に結び付けられることはもちろんのこと，博物館における利用者に共通する困難の実態を把握し，どのようにかつどの程度改善を進めるかの判断材料となることが期待される．

5点目は，ASD当事者が博物館から除外される事象の実態を明らかにすることである．今回の調査で，回答者の6.6%が，ASDを理由とした講習会やボランティア活動の参加拒否の経験があると答えた．一方，駒見（2008, 69-70）において,「『学芸業務の補助としては専門知識が乏しい』『来館者の接待には不向き』『肢体不自由もあり危険が多い』などの理由」で，発達障がい者が博物館で除外されているケースが示されている．ここでの発達障がいが何を指すかは示されていないが，仮にASDの旧診断名が該当する場合，既に述べた関心分野に深い知識を持つタイプ，対人業務に適性を示すタイプの他，細かい緻密な作業が得意なタイプ（上野 2012, 98）もいるため，博物館側の先入観から生じた受け入れ拒否の可能性は否定できない．今回の調査での除外経験および駒見の指摘するケースが発生した時期や，現在も発生しているかどうかは不明である．実際にどのような参加拒否がどのような背景のもと行われていた（いる）か，どのような改善策や受け入れがなされているかを明らかにすれば，ASD当事者の博物館における学びの機会を保障するための方策を導くことが期待できるだろう．

ASD当事者に特化した博物館利用の促進および利用支援や，利用者に共通する困難の改善は，誰もが利用しやすい博物館，すなわち博物館のユニバーサルデザインに繋がる．これより，博物館は多様な人々の博物館利用や市民とのコミュニケーションを促す場として発展することが期待される．それが結果的に地域づくりや地域の活性化にも貢献していくだろう．

5. 展望―大学博物館におけるASD当事者就労支援学習プログラム開発に向けて

今後のASD当事者の博物館利用促進・支援の展望として，当事者と非当事者の接触についても述べたい．石田は発達障がい者の多様性に着目し，館の職員が実際に当事者と接する具体的な体験を通して「どうつきあったらいいのか」を知ることが重要だと指摘している（松永他 2008, 17）．職員や一般来館者がこのような機会を持っていれば，彼らと接した経験を踏まえたサポートができるだろう．また，特性由来の行動や困難への誤解防止にも繋がる．当事者と非当事者の相互接触から得た経験や理解を活かせば，誰もが利用しやすい博物館を目指すことが可能となる．長期的には博物館に限らず，地域や社会においてASD当事者理解・支援に波及する効果も期待できる．

筆者（沼崎）は現在，ASD当事者向け就労支援学習プログラムの開発を構想している．ここでASD当事者と非当事者が共に博物館活動を行うことにより，博物館における科学コミュニケーション活動や，当事者―非当事者の相互理解を深めることが期待される[11)]．

博物館という科学コミュニケーションの場における多様な人々の関わりは喫緊の課題である．マイノリティも博物館活動の担い手となってこそ，科学コミュニケーションがあらゆる立場の人々を包括するものとして成立することが可能となるのである．

謝辞

本調査にご協力くださいましたASD当事者の皆様，当事者団体の代表様，支援機関や医療機関・教育機関のご担当者様，ご協力者様をご紹介くださった方々，ご意見をくださいました北海道大学大学院理学院自然史科学専攻科学コミュニケーション講座の先生方・大学院生の皆様に深く御礼申し上げます．

注

1)「しょうがい」の表記には「障害」「障がい」「障碍」などがあり，どれが適切かは専門家間・当事者間でも様々な議論がある．本稿では本来の表記である「碍」が常用漢字外であることを考慮し，基本的に「障がい」，制度名・診断名・医学用語や引用として用いる際は「障害」と表記している．また，本稿での「当事者」とは，ASDおよび旧診断名と診断された者を指す．

2) 大学研究室や支援団体が主催する思春期～青年期の当事者の自己理解促進合宿プログラム（木谷 2014），学生相談室におけるカウンセリングの事例に基づく大学における対人コミュニケーション・修学・就労支援研究（中島 2013）他多数．

3)「高機能」という場合にはIQ70以上という基準が用いられることが多いが，専門家の間では「明らかな知的な遅れがない」という意味でも使われている（内山 2002, 2）．本稿では後者の用例に従って用い，本稿での「高機能タイプ」とは，知的遅れのない者（旧診断名におけるアスペルガー症候群・PDD-NOS・PDDの一部・高機能自閉症）を意味する．

4) その他，駒見（2008, 66）では博物館の飲食施設やミュージアムショップでの発達障がい者雇用の事例をあげているが，示されている例は知的障がいと肢体不自由であり，高機能タイプの発達障がい者が含まれているかどうかは不明である．

5) DSM-5における診断基準はAmerican Psychiatric Association（2013, 50-59），DSM-Ⅳ-TRではAmerican Psychiatric Association（2003, 55-59）を参照．なお，DSM-5以前に診断を受けた当事者は当時の診断名を自身の診断名として用いることが多いため，本稿では必要に応じて旧診断名を用いる．また，「アスペルガー症候群（AS）」とは厳密に言えばもう一つの国際的診断基準であるICD-10における表記であるが，両基準は非常に類似しており，「症候群」「自閉症」表記が一般に広く用いられているため，本稿では基本的に「アスペルガー症候群」「自閉症」，他文献からの引用表記に従う場合は「アスペルガー障害」「自閉性障害」と表記する．なお，DSMには記載されていないが，「高機能自閉症」（自閉症かつIQ70以上の場合）という診断名もある（前掲内山，7）．

6) 質問紙冒頭で，回答は任意であること（回答の内容によって回答者が不利になることはないこと，答えにくい質問には答えなくて良いこと），回答者のプライバシーを守ること（調査者（沼崎）のみが回答を読み他者に回答者がどう答えたかを知られることはないこと，結果を表に出す際は匿名・仮名とすること）を記載した．後付では，論文等で自由回答を記述する際に記載を希望しない属性の有無を記載させた．これは，調査対象者が少数であることや，当事者会等で当事者同志の交流の機会があることを考慮すると，記載された属性によっては個人の特定に繋がる恐れがあるためである．
また，一般の調査とは異なり，ASD当事者を対象とする今回の調査では，依頼や回答に際して誤解や理解の不足がないように，調査対象者が協力の可否を判断しやすいように，より配慮が必要である．よって，表紙および後付で記載した内容については，質問紙記載にとどまらず，調査者が調査対象者に対し，調査者が直接（調査者が同席しない場合は文書によって）説明した．集合調査の依頼型および留置き調査の場合は他の調査と説明内容や実施方法を統一するため，調査者は機関担当者に対し調査実施マニュアルを作成し，それに従っての実施を依頼し，同意を得た．機関担当者はマニュアルに沿い，対象者への十分な説明を行った．その上で調査に同意した者に回答を依頼し，実施マニュアルに基づいて調査を実施した．

7) ASDの診断名は診断基準の変更や医師によって変化することがある．よって，同年齢で複数の診断がついている場合は，質問紙の最上位に書かれたものを現在の診断名とした．また，「その他」および無回答者については，機関等の担当者や紹介者に，未診断者は調査対象とならないことを説明し同意を得ていたため，ASDに該当する何らかの診断を受けているとして扱った．

8) 本稿および本調査における「障害者手帳」は，公的機関の認定を経て発行される身体・精神問わず広義での障害者手帳を意味する．

9) 回答受信日：2013年10月12日．追加調査の対象となったのはこの10名のうち面接調査に協力可能と回答した2名．うち1名とは連絡がつかなかった．なお，当初電子メールでの追加調査は予定していなかったが，設問数に対する移動の負担を考慮し，対象者の同意を得て実施した．

10) この回答者に対する調査の1年前および1か月前に，札幌市内の美術館および商業施設において，サブカルチャーやアニメを扱った美術企画展が開催されており，それを観覧もしくは踏まえての回答と思われる．

11) プログラム開発の一つのヒントとして，北海道大学総合博物館で開講されている「社会体験型科目」がある．これは，学生・大学院生が展示解説や教育普及イベントの企画・運営，映像制作，ミュージアムショップで販売するミュージアムグッズの開発，展示制作などを行う科目群である．博物館の社会的役割およびプレゼンテーションや交渉等のビジネススキルを学ぶだけでなく，来館者や外部業者との接触により社会性やコミュニケーション力を育成することも目的としている．

●文献：

American Psychiatric Association 2013：*Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-5,* American Psychiatric Publishing.

American Psychiatric Association編 2003：髙橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳『DSM-IV-TR精神疾患の分類と診断の手引：新訂版』医学書院; American Psychiatric Association, “Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-IV-TR,” American Psychiatric Publishing, 2000.

美術館×インクルーシブ×デザイン実行委員会　みんなの美術館プロジェクト 2012:『みんなの美術館 デザインノート』
http://www.museumforall.org/pdf/DESIGN_NOTE.pdf (2014年2月22日 閲覧).

伊藤寿朗 1993:『市民のなかの博物館』吉川弘文館.

木谷秀勝 2014:「自分の障害を理解する（[特集] シリーズ・発達障害の理解①　発達障害の理解と支援）」『臨床心理学』14 (1), 61-64.

駒見和夫 2008:『だれもが学べる博物館へ: 公教育の博物館学』学文社.

P.コトラー・N.コトラー 2006: 井関利明・石田和晴訳『ミュージアム・マーケティング』第一法規; Kotler, N. and Kotler, P., *Museum Marketing and Strategy: Designing Missions, Building Audiences, Generation Revenue and Resources,* John Wiley & Sons, Inc., 1998.

栗田弘・長田洋和・小山智典・金井智恵子・宮本有紀・志水かおる 2004:「自閉性スペクトル指数日本版（AQ-J）のアスペルガー障害に対するカットオフ」『臨床精神医学』33 (2), 209-214.

松永真純・山本哲也・満長正明・石田義典・姜博久・鈴木千春 2008:「討論1（特集　博物館/障害者/バリアフリー）」『大阪人権博物館紀要』11, 14-21.

的場康子 2006:「育児世代の美術館・博物館の利用実態」『Life design report』(176), 4-15.

マックギニス 2007：広瀬浩二郎監訳「米国のミュージアムにおけるユニバーサル・デザイン: その課題と現状」広瀬浩二郎編『だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム:“つくる”と“ひらく”の現場から』読書工房, 11-32.

みんなの美術館プロジェクト:「みんなの美術館の気づきデータベース」
http://www.museumforall.org/db/index.php（2014年2月22日 閲覧）.

三谷雅純 2007:「博物館テキスト『子ども自然教室』のユニバーサル化の課題」前掲広瀬編, 45-55.

文部科学省 2013:「社会教育調査 平成23年度 統計表 博物館調査（博物館）博物館の施設・設備の所有館数」総務省統計局e-statウェブサイト
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001047460&cycode=0よりダウンロード（2014年2月22日 閲覧）.

村上由美 2010:「言語聴覚士という仕事から開けた世界」梅永雄二編『仕事がしたい！発達障害がある人の就労相談』明石書店, 222-235.

中島暢美 2013:『高機能広汎性発達障害の大学生に対する学内支援』関西学院大学出版会.

布谷知夫 2013:「博物館の社会的役割を意識的に考えよう（特集／今，改めて問う博物館の役割）」『博物館研究』48 (1), 5-8.

岡田尊司 2009:『アスペルガー症候群』幻冬舎新書.

千住淳 2014:『自閉症スペクトラムとは何か: ひとの「関わり」の謎に挑む』ちくま新書.

内山登紀夫 2002:「高機能自閉症・アスペルガー症候群とは」内山・水野薫・吉田友子編『高機能自閉症・アスペルガー症候群入門: 正しい理解と対応のために』中央法規出版, 2-12.

上野一彦監修 2012:『大人のアスペルガーを知る本』（イラスト版こころの健康クリニック）アスペクト.

山本哲也 2008:「博物館としょうがい者（特集　博物館/障害者/バリアフリー」）」『大阪人権博物館紀要』11, 1-9.